

ベートーヴェンが見せる希望の世界

2020年11月12日 久元祐子ピアノリサイタルレポート



2020年は大変な1年でした。楽しみにしていたあのコンサート、あの展覧会、久しぶりの観劇…と軒並み中止や延期。でも最後の最後に素晴らしいプレゼントをいただきました！

それは、去る2020年11月12日、東京の紀尾井ホールで開催された「久元祐子ピアノリサイタル」。

プログラムは、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ〈悲愴〉〈ワルトシュタイン〉を中心に、関連づけて〈悲愴〉と同じハ短調のモーツァルトの幻想曲KV475とピアノ・ソナタKV457、もともと〈ワルトシュタイン〉の第2楽章として書かれた《アンダンテ・ファヴォリ》WoO.57という構成です。前半のモーツァルト作品と〈悲愴〉、後半の《アンダンテ・ヴァフォリ》と〈ワルトシュタイン〉とで、作曲時に使用された楽器が異なる——つまり、前半はヴァルター製作のフォルテピアノによる作品群、後半は当時の最新鋭、イギリス式アクションのエラール社のピアノによる作品群——という事に気づくと、演奏への期待が一層増します。

そしてこの日、「ヴァルターの世界」と「エラールの世界」の表現が高いレベルで緻密に分けられた演奏に期待以上の満足感を味わう事ができました！〈悲愴〉ではまるで“休符が聴こえるよう”な静謐さ、〈ワルトシュタイン〉では音符がダイナミックに翔びまわり、自然への憧憬そのもののような“深い森の音”が聴こえたのです——。



▲久元祐子先生と愛器「ベーゼンドルファー 280VC ピラミッド・マホガニー」



© 武藤 章

この繊細な表現を実現したのは、初お披露目の久元祐子先生の愛器「ベーゼンドルファー 280VC ピラミッド・マホガニー」。先生と一体となって感動の音世界を創り上げます。特に、〈ワルトシュタイン〉の第3楽章は、いろいろな苦難が浄化され、希望へと昇華し会場に満ち溢れたような、そんな神々しさにしばらく身動きできないほどでした。あの空間を共有できた喜びは何物にも代えがたい体験です。

ベートーヴェンイヤー、(か)にとって最初で最後のベートーヴェンプログラムの演奏会がこのリサイタルで本当に良かったと、心から思えた一夜でした。